



Title	新出本・ヘルツォーク・アウグスト図書館蔵ローマ字本『コンテムツスムンヂ』（1596年天草刊）について
Author(s)	岸本, 恵実; 白井, 純
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2019, 59, p. 37-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72097
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

新出本・ヘルツォーク・アウグスト図書館蔵ローマ字本 『コンテムツスムンヂ』（1596年天草刊）について

岸本恵実・白井 純

1. はじめに

修養書『イミタティオ・クリスティ（キリストにならいて）』の邦訳であるキリシタン版 *Contemptus mundi*, 1596（ローマ字本『コンテムツスムンヂ』）の現存本として、従来知られていた二本に加え、ドイツ・ヴォルフエンビュッテル（Wolfenbüttel）のヘルツォーク・アウグスト図書館（Herzog August Bibliothek（HAB））所蔵の一本が発見された。本稿はその報を受けて2017年8月に行った現地調査の結果をふまえ、新出本の基本書誌とそれに基づく考察を報告するものである。この本の全画像はすでに、右の標題紙を含め、同図書館のデジタルライブラリーにて公開されている。

この本の資料的価値は、キリシタン版の成立・印刷を考えるうえで新たな材料をもたらしたことにあろう。本稿はそれに合わせる形で、本文成立に関わる前半2・3章の基本情報を岸本が、印刷・用紙に関する後半4章を白井が執筆を担当した。



© Herzog August Bibliothek Wolfenbüttel
< <http://diglib.hab.de/drucke/57-13-eth/start.htm> >

2. これまで知られていた二本と研究小史

標題紙には、三本とも以下のように印刷されている（上の画像も参照されたい）。

CONTEMPTVS / mundi jenbu. / CORE YO VO ITOI, IESV CHRIS- / tono
 gocõxequio manabi tatematçu- / ru michiuo voxiyuru qiõ. / NIPPON IESVSNO
 COMPANHIA / no Collegio nite Superiores no goguegiuo / motte corevo fanni fraqu
 mono nari. / Toqini goxuxxeno nenqi. 1596.

『コンテムツスムンヂ』全部。これ世を厭ひ、ゼス・キリシトのご行跡を学び奉る道を教ゆる経。日本ゼズスのコンパニヤのコレジオにてスペリヨレス（上長）のご下知を以てこれを版に開くものなり。時にご出世の年紀。1596。]

これまで知られていた二本は、ミラノ・アンブロジアーナ図書館本（以下、A本）とオックスフォード大学ボドレイ図書館本（B本）である。新出本ヘルツォーク・アウグスト図書館本（HAB本）については次章以降で述べる。A本は、影印に海老沢編（1978）、翻字に尾原編（2002）、B本には影印に松岡・三橋解説（1979）、翻刻に高羽（1955-56）、翻字に姉崎（1932）がある。またB本影印を底本とした索引に近藤編（1980）がある。

ローマ字本『コンテムツスムンヂ』は、Laures（1957）の目録ではキリシタン版16番目の刊行物にあたる。標題紙に「日本ゼズスのコンパニヤのコレジオにて」とあることから、刊行地は1591-97年コレジオのあった天草とみなされる。現存するキリシタン版には、『イミタティオ・クリスティ』のもう一つの邦訳である、国字本『こんてむつすむんち』（1610年京都刊）がある。全体的に欧文原典に忠実なローマ字本に比べ、国字本は、文体や用語が平易な抄訳である。

日本における『コンテムツスムンヂ』研究史は小島（2009）に詳しく、その後近年では、信仰史研究としての五野井（2017）、史料に基づくコレジオ研究である高瀬（2017）でもふれられている。以下、新出本に関わる歴史的経緯と研究史とを、小島（2009）と尾原編（2002）によりつつごく簡略にまとめる。

『コンテムツスムンヂ』は1580年代には邦訳され、おそらく写本の形で細川ガラシヤも愛読していたというが、1590年将来された欧式活字印刷機により1596年にローマ字本が印刷され、1610年国字本が印刷された。また現存は確認されないが、国字本が1597年ごろ・1602年・1613年ごろにそれぞれ印刷されたらしい記録があり、日本人キリシタンに広く読まれたようである。

近代以降、ローマ字本はSatow（1888）がB本を紹介してからキリシタン版の一つとして知られるようになり、国字本も新村・柊校註（1957）などに翻刻されたが、1970年代以降のローマ字本・国字本影印刊行により両書の日本語研究が促進された。とくに語のよみや用語について、しばしばローマ字本と国字本とを対照させる形で研究がなされた。その後、鈴木（1994）が契機となり原典研究が進んだが、現在のところ邦訳底本が、ルイス・デ・グラナダによるスペイン語訳版『コンテムツスムンヂ』か、ローマ字本序文に「ラチンの正本

より確かに翻訳し、校合度度に及んで、深旨を和らげて以て梓に鏤む」とある通りラテン語版であるかは、まだ確定していない。豊島（2015a：257）が推測するように、複数の版が参照された可能性が大きいと考えるべきだろう。

3. 新出本（HAB本）の基本情報

3.1. ヘルツォーク・アウグスト図書館について

HAB本を所蔵するヘルツォーク・アウグスト図書館は、ドイツ北西部ニーダーザクセン州（州都ハノーファー）の小都市ヴォルフエンビュッテルにある、この地の領主であったヘルツォーク（公爵）・アウグスト（1579-1666）のコレクションを主起源とする図書館である。17世紀末から18世紀初めに哲学者ライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz）が司書を務め、コレクションを整備したこと、建物と内装が美しいことでも知られる。

図書館のウェブサイトによると、蔵書は100万点（写本1万2千点、1850年以前の印刷物41万点を含む）ある。特に17世紀のコレクションが充実しており、ドイツの六つの主要図書館が参加しているドイツ刊行物コレクション（Summlung Deutscher Drucke）という連携事業において、17世紀刊行物の収集を担当している。また現在、蔵書のデジタル化と公開を進めており、HAB本の画像公開もその流れの一部である。図書館の略年表を以下に記す。

- 1572年 領主ユリウス公（1528-1589）の図書室が置かれる
（1662年 HAB本がアウグスト公に献呈される）
- 1666年 アウグスト公の蔵書公開
- 1690-1716年 ライプニッツが司書を務める
- 1887年 本館が建築される
- 1989年 ニーダーザクセン州科学文化省の管轄となる

3.2. HAB本の発見について

HAB本の発見については、まずDauer（2017）に図書館からのニュースとして報じられ、その後発見者による報告Triplet（2018）が発表された。Triplet（2018）によると、図書館の倫理学のコレクションを調査していたヨーロッパ倫理学専門のMatthias Roick氏（ゲッティンゲン大学フェロー）がこの本の存在に気づき、日本宗教史専門のKatja Triplett氏（ゲッティンゲン大学近代東アジア研究センター）に伝えたことが、発見につながったという。

Triplet（2018）では発見の経緯、書誌解説に加え、プロテスタントであったアウグスト

公がこの本を神学書に分類せず、倫理学書に入れたために、長年発見されなかったと推測している。以下本章では、Triplet (2018) と一部重複するところがあるが、書誌と他の二本との相違を中心に記述する。

3. 3. HAB本の概要

HAB本の請求記号は「A: 57.13 Eth.」であり、Triplet (2018) が報じた通り倫理学のコレクションに入っている。

3. 3. 1. 付属カード

HAB本には、1662年アウグスト公に献呈されたことを示す14.1 × 19.9cmのカードが付属している。翻刻および大意を記す。

Sereniscime Dux, /

Princeps Clementissime, /

Gegenwartiges buch, is zwar der Sprache nach Japonisch, aber doch mit lateinischen / characters oder literis formiret. Das Argumentum desselben ist de Contemptū mūdi, / und haben es die Lojolitae im vorigen Seculo vielleicht zu dem ende drucken lassen, das / selbige völker desto mehr solten zu Pāpstischer Religion geführet werden. Bißweilen ist / ein dictūm Scripturae darinnen citiret, und zwar ex latinis Biblis vulgatae Editionis, quae a / pud ipsos Authentica habentur. Könnte derowegen dieses buch etwa genennet werden: / Tractatus de Contemptu mundi in lingua Japonica, curante Societate Jesu impressus. / Untertänigst /

Den 3. Julij Ad 1662.

[誠に高貴な閣下、慈愛に満ちた首長、

この書は、言語は日本語であり、文字はラテン文字を用いています。内容は「世の厭い」であって、前世紀にロヨラ派（イエズス会）が、教皇流の宗教（カトリック）を当該民族に広めるために印刷させたものです。

ところどころに聖書を引用していますが、これは同じ権威（ローマ教皇）から得たウルガタ版聖書によるものです。ゆえに本書は、おおよそ次のように名付けるべきでしょう。

「イエズス会によって印刷された、日本語による『コンテムツスムンヂ』」

頓首

1662年7月3日]

残念ながら献呈者名や、献呈者による入手経緯は不明である。またこの図書館には HAB 本のほか、日本キリシタン関係資料としては、日本イエズス会報告の刊本が複数ある程度のものである。ユリウス公以来この地の領主がプロテスタントであり、アウグスト公もプロテスタントであったためだろう。

標題紙右方にラテン語で、*Japanice typis in Japonia excusus* [日本で、日本語で印刷された] の書入れがあるが、付属カードとは別筆である。このほかに本文に書入れはないようである。

3.3.2. 基本書誌

HAB 本の基本書誌は以下の通りである。参考として B 本・A 本の情報も記した。用紙・保存状態は4章にて詳述する。

〈大きさ〉

オクタボ、15.4 × 10.0cm

(B本 17.5 × 11.0cm、A本 16.6 × 10.5cm)

〈装丁〉

原装無地革表紙

〈構成〉

4巻1冊、[1] (標題紙)、433 (本文)、[11] (目録)、[16] (和らげ)

遊び紙 前4葉・後ろ8葉

(B本 前5葉・後ろ3葉、A本 前1葉・後ろ1葉)

3.3.3. 校異

HAB 本と、B 本・A 本との校異を記す。HAB 本は全体として、B 本・A 本に比べ校正前の箇所が多い本といえる。

〈HAB 本・B 本・A 本共通の誤植〉

p. 47, l. 13 *sunauachi* 二つ目の a の上にティルが見える。

p. 219, l. 17 *Carugayuyeni vōmino govouo mi* の *govo* の上のティルが脱落している。

p. 205 ページ番号「205」が重複している。

p. 217 ページ番号が「127」になっている。

p. 226 ページ番号が上下転倒している。

p. 419 ページ番号が「149」になっている。

〈HAB本・B本と、A本との相違〉

p. 6, ll. 5-9

HAB本・B本（訂正前）

OCVLVS non vidit, nec auris audiuit, nec
in cor hominis ascendit, quae praeparauit Deus ijs,
qui diligunt illum. 1. Cor. 2. *Manacoua mi*
rucotoni acazu , mimiua qiqu cotouo motte
taxhezuto iyeru tattoqi qiõmonno gouo tçu-

「コリント人への第一の手紙」2章9節（人の目が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともなかったこと、これこそ、神がご自分を愛する者たちのために用意してくださったもの）のラテン語文を引用のあと、「眼は見ることに飽かず、耳は聞くことを以て達せずと言へる尊き經文の語を常に」と対応しない日本語の訳文が続く。

A本（訂正後）

NON SATVRATVR OCV-

lus visu nec curis auditu impletur. Ecclesia-
stes capite primo. *Fitono manacoua mi-*
rucotoni acazu , mimiua qiqu cotouo motte
taxhezuto iyeru tattoqi qiõmonno gouo tçu-

「コヘレトの言葉（伝道の手紙）」第1章8節（目は見ても飽き足りず、耳は聞いても満ち足りることがない）のラテン語文を貼りこんだあと、「人の眼は見ることに飽かず、耳は聞くことを以て達せずと言へる尊き經文の語を常に」と正しく日本語の訳文が続くよう訂正されている。

〈HAB本と、B本・A本との相違〉○印は、HAB本が正しい箇所

○p. 60 ページ番号がHAB本「60」 B本・A本「80」

p. 60, l. 2 HAB本 *Va gaCõsciencia* B本・A本 *Vaga Cõsciencia*

p. 112, l. 10 HAB本 *macotoni* cが上下転倒している。B本・A本は正立。

p. 147, l. 10 HAB本 *micotobauo chõmõ xinagara mõ* のティルがほとんど見えない。

B本・A本 ティルが見える。

p. 241, l. 3 HAB本 *vosoreu o mot-* B本・A本 *vosoreuo mot-*

p. 302, l. 3 HAB本 *cauariniua icaini aguerare* B本・A本 *cauariniua ycaini aguerare*

○p. 392, l. 7 HAB本 *vyeyo facarai tamaye:* B本・A本 *vyeyo facarai a tamaye:*

B本と共通の錯誤である p. 6 の聖句は、写本時代の邦訳を踏襲したものであろうか。キリシタン版に引用される聖句がウルガタ版聖書によっていないこと、それがローマ字本『コンテムツスムンヂ』にも当てはまることは豊島(1993)・同(2015a)に指摘されていることから、この錯誤は欧文原典(の一つ)を特定する根拠になりえよう。しかしこの箇所を「コリント人への第一の手紙」に誤った版は未見であり、今後の調査を俟ちたい。

4. 用紙からみたHAB本『コンテムツスムンヂ』の特徴

4.1. 原本の状態と用紙の特徴

以下は、HAB本『コンテムツスムンヂ』(1596年天草刊)の印刷上の瑕疵、および水の染みやカビ跡と用紙の厚みの関係についてまとめたものである。検討にあたっては、白井が同時期に行ったライデン本『羅葡日辞書』(1595年天草刊)および『ヒイデスの導師』(1592年天草刊)(ともに雁皮紙、両面印刷)・『落葉集』(1598年長崎刊)(楮紙、片面印刷)との比較も行った。

HAB本『コンテムツスムンヂ』は製本後に水没、もしくは極度の湿気に襲われたためか草表紙を含む本全体が歪んで硬くなり、見開きで60-70度しか開かない。用紙はかなり波打ち歪んでおり、このことは特に本の左上で顕著だが水害の影響と思われる。その結果として、天、地、小口の各方面からの水の染み跡が目立つ。また、カビによる変色の跡も多い。

用紙は基本的に雁皮紙と思われるが、所々に大きな繊維が交じる。例えば87ページ(F紙5オモテ)(以下F5r:87のように表記)、F7r:91(図1)、F7v:92、F8r:93(図2)、R2r:256、R4v:261、R5r:263(図3)にみられるが、F紙とR紙に集中しており、品質の良くない用紙である。

但し、HAB本『コンテムツスムンヂ』全体でこうした例が目立つわけではない。混入した繊維が楮だとすると、少なくともこれらの用紙は楮交じりの雁皮紙(楮斐紙)ということになるが、繊維の見られない用紙と比較して印象が大きく異なるわけではないので、二種類の異なる用紙を取り混ぜて用いたというより、厚手の用紙から薄手、または繊維の混ざる用紙まであ

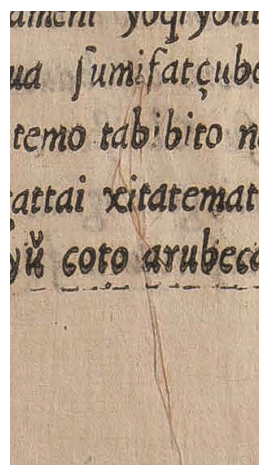


図1 F7r:91 大きな繊維

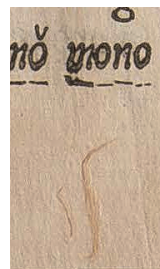


図2 F8r:93 大きな繊維



図3 R5r:263 大きな繊維

るが基本的には雁皮紙であり、品質が著しく不安定というべきだろう。なお、ライデン本『落葉集』などの国字本の片面印刷に用いられた楮紙とは明らかに印象が異なる。

同様の繊維はライデン本『羅葡日辞書』（図4,5,6）および『ヒイデスの導師』（図7）の用紙にもみられる。

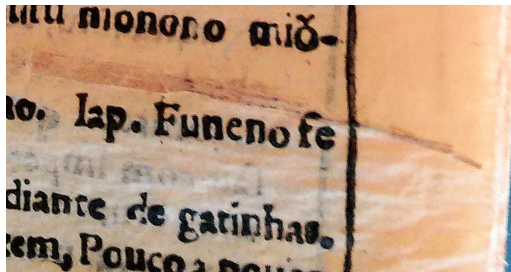


図4 羅葡日 647 大きな繊維



図5 羅葡日 661 大きな繊維

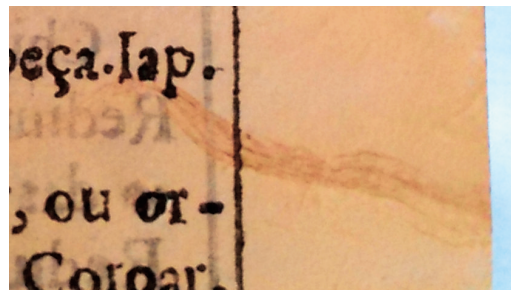


図6 羅葡日 681 大きな繊維

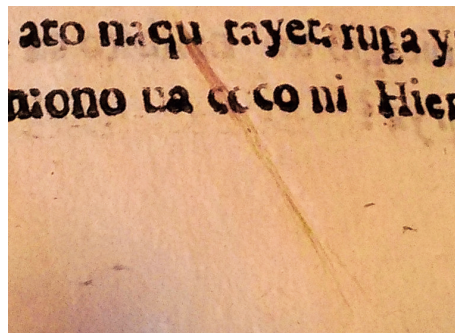


図7 ヒイデスの導師 338 大きな繊維

4折（クワルト）版の『羅葡日辞書』ではn*1r：645からz*4v：732までの用紙は薄く裏写りが激しいが、aa*1：733から顕著に回復する。繊維が目立つ部分はこれらの用紙が薄い部分に集中しており、用紙の品質の低さを示す特徴である。印刷の進行に照らして考えるなら、良質用紙の不足と追加供給があったのかもしれないが、このことを明らかにするためには別本との比較が必要となる。

光学顕微鏡を用いた豊島（2014b:153）・同（2015b:421）の原本調査によれば、東洋文庫本『ドチリナキリシタン』（1592年天草刊）および『フロスクリー』（1610年長崎刊）は交じりのない雁皮紙であり、同様に豊島（2014c:460）によれば、上智大学キリシタン文庫の『サクラメンタ提要』はすべて雁皮紙だが、東洋文庫本『サクラメンタ提要』は大部分が雁皮紙

でありながら一部に楮紙を交えるという。大きな繊維を含むライデン本『羅葡日辞書』・『ヒイデスの導師』、HAB本『コンテムツスムンヂ』の用紙がすべて純粋な雁皮紙かどうかは、肉眼と触感だけでは判別し難い。白井の印象では、キリシタン版の国字本の楮紙は比較的均一だが、ラテン文字本の用紙(イエズス会が言うところの「鳥の子」の和紙)には品質にばらつきがあるように思われる。当時の日本側の文献では、雁皮紙は原則として書写用で、一本のなかでこれほどの品質のばらつきは無いようにも思われるが、現時点で確かなことは言えず、この点は今後の調査で注意することとしたい。

HAB本『コンテムツスムンヂ』の雁皮紙は理想的な状態であれば相応の厚みがあるため金属活字によるプレス式両面印刷にも耐えるが、実際には厚みが一定でなく、楮紙ほどではないが薄手の用紙も混じる。ラテン文字本の用紙の厚みが均一でないことは、エボラ公共図書館本『天草版ラテン文典』(アスンサン・豊島(2012:285))やフランス学士院本『羅葡日辞書』(岸本・三橋(2017:943))でも指摘されており¹⁾、ライデン本『羅葡日辞書』および『ヒイデスの導師』にも共通するが、薄手の用紙に両面印刷するため当然ながら裏写りが激しい。それに加えて、薄手の用紙では転写も起こりやすく、染みやカビ跡も多いようにみえる。以下には、印刷上の瑕疵(裏写り、転写)および保存上の被害(染みやカビの跡)について、用紙の厚みとの関連を中心に検討することとしたい。

4.2. 転写と裏写り

キリシタン版ではしばしば印字面の一部が誤って転写される印刷上の瑕疵が発生しており(豊島(2013:113)、同(2014b:155))、HAB本『コンテムツスムンヂ』にも同様の特徴がみられ、このことはライデン本『落葉集』、『羅葡日辞書』および『ヒイデスの導師』にも共通する。

HAB本『コンテムツスムンヂ』はオクタボ(8折)版であり、1枚の用紙に片面8頁を割り付け、両面で16頁分を印刷してから用紙を折り、裁断してから製本する。複数頁に及ぶ印刷時の瑕疵の観察に際しては割り付け方法の理解が前提となるが、例えばオクタボ版のA紙は1頁から16頁(1r(オモテ)から8v(ウラ))までであるのが原則であるから、用紙が切り替わる箇所には特に注意が必要である。

HAB本『コンテムツスムンヂ』で転写が顕著なのはAa紙とBb紙(用紙と用紙内頁番号は頁下部に表示される)で、転写が薄く文字の判別が難しい箇所も多いが、Z8v:365(図8)には対面となるAa1r:366の下から3行目“Mifsauo”の転写が不鮮明ながら判別できる(画像中央に左右反転して“Mi”が判読可能)。

Aa1v:367(図9)とAa2r:368(図10)ではそれ

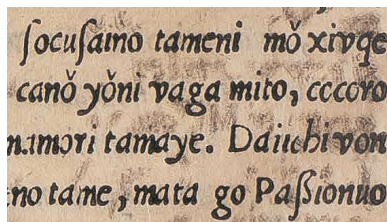


図8 Z8v “Mi” 転写(画像中央)

ぞれ裏写りが激しいうえ対面頁の転写もあって非常に読みにくい。

Aa2r : 368 の左下の転写は特に顕著で、下から順に左右反転して“uqueuo vqe”、“miuo cux=”、“cotouo negai”、“vyamaiuo”とはっきり判読できるが、これらは Aa1v の右側の転写とみて間違いない。同様に Aa2r : 368 の右側には左右反転して“yuye”、“go”もみえるが、これも Aa1v : 367 の左側の転写である。

こうした転写は、軽微なものも含めると、Aa2v : 369、Aa3r : 370、Aa6v : 377、Aa7r : 378、Bb1r : 382、Bb3v : 387、Bb4r : 388、Bb8r : 396にもみられる。また、Dd紙も薄く裏写りが激しいほか、Ee1r : 430 右側にも判読はできないがアルファベット活字のインクの汚れがみられる。

印刷上の瑕疵をもつ用紙はしばしば薄く、そのことが無関係とは思われない。裏写りは用紙の薄さが直接的に招くものだが、転写は印刷時に用紙を湿潤させた際の水分調整がうまくゆかず、用紙が過度に湿潤されることによりインクの乾燥が遅れたまま重ねたり、折りたたまれたりすることによると推定される。楮紙を用いる当時の

整版では用紙を湿潤してから印刷するのが一般的だが、豊島（2013:111）によれば、雁皮紙にプレス式金属活字印刷を行ったキリシタン版も同様であり、ライデン本『ヒイデスの導師』のA紙とH紙に湿潤が過度となり印字がボケたと思われる例があることを指摘している。

豊島（2013:113）がいうようにライデン本『ヒイデスの導師』には印刷上の問題が少なくないが、O4v : 204 には P1r : 213 が、O7r : 209 には P6v : 224 が、O8v : 212 には P5r : 221 の一部が転写されている。O5r : 205 左上（図11）には反転して上から、“unaua -”、“Sono”、

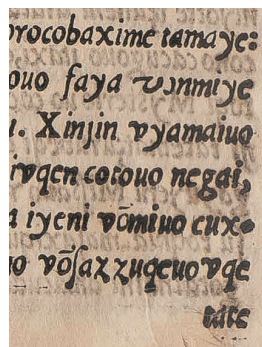


図9 Aa1v : 367 対面頁転写 (右下)

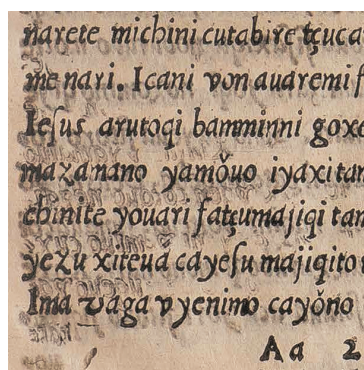


図10 Aa2r:368 対面頁転写 (左下)

表1 オクタボ版の各頁配置 (第一種配置)

用紙表				用紙裏			
3r ↑	6v ↑	5r ↑	4v ↑	2r ↑	7v ↑	8r ↑	1v ↑
2v ↓	7r ↓	8v ↓	1r ↓	3v ↓	6r ↓	5v ↓	4r ↓

“ri”、“nin”、“jū”などが判読でき、P8v:228 上部右端の文字列に一致する。

こうした転写は、オクタボ版で裁断前に折らずに裏返し、用紙オモテ同士が接触するように重ねた場合に発生する。オクタボ版の各頁配置を表1に示す。

用紙の中央（表1では二重線）が各頁の上部であり、一枚の用紙に原則として8面を同時に印刷し、裏面に再度印刷した後に折り、裁断して製本する。豊島（2013:119）によれば、オクタボ版には第一種配置と第二種配置があるというが、ライデン本『ヒイデスの導師』および大英図書館本『天草本平家物語』『天草本イソボ物語』『金句集』合冊本、東洋文庫本『ドチリナキリシタン』にみられる印字ずれの分析から、同時期のキリシタン版ローマ字本は第一種配置だったと推定している。ライデン本『ヒイデスの導師』で今回確認した転写の状況も、これと矛盾しない。

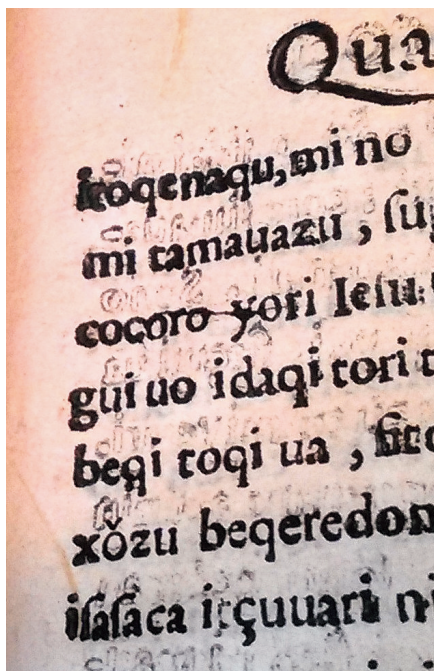


図 11 O5r P8v の写り込み (左上)

キリシタン版ローマ字本には用紙が折られる前と後の双方で印字の転写がみられたが、楮紙に印刷されたライデン本『落葉集』の「色葉字集」「百官」「国尽」上部にも裏写りではない対面頁の転写（図12,13）がみられる。ただしインクそのものではなくインクの油脂分のように見える。杉本つとむ（1984）の複製本では殆ど消えてしまっているが、原本ではかなり鮮明に見えており容易に確認できる。

但し、用紙は均質な楮紙であり、転写の有無が用紙の厚みによらないことは明らかである。同様の例は「色葉字集」（全23丁）の末尾付近（19ウ）から「百官」「国尽」（全4丁）に集中する。豊島（2014b:155）によれば、東洋文庫本『ドチリナキリシタン』にみられる転写には、印刷直後の裁断前に用紙が折られた際に写り込んだもの、裁断して製本された後にゆっくり写り込んだものがあるというが、ライデン本『落葉集』の状況は、印刷から折り重ねまでの時間的経過に相違があり、末尾に近い部分では印刷の後、相対的にみて短時間で二つ折りにされ製本されたため転写が起こったことを示すと思われる。

また、パリ国立図書館本『落葉集』の電子画像にこうした特徴はみられない。

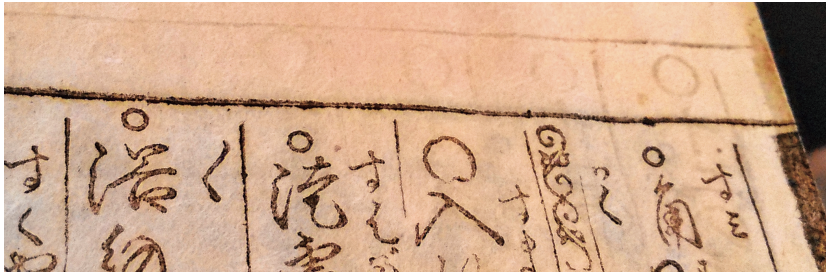


図12 「色葉字集」22丁ウ 23丁オの写り込み（上部）



図13 百官3オ 百官2ウの写り込み（右上）

4.3. 染みとカビ

HAB本『コンテムツスムンヂ』の扉A1rでは、左上、右上、右側面、左下、右下に染み跡があり、とくに左上は波打ち、染み跡がA2r:1以降にも強く現れ、影響はA8v:14（図14）まで貫通しているので、これらの染み跡が用紙の折り重ね後の被害によることは明らかである。

ところがA8v:14と対面になるB1r:15（図15）では、同様の位置に僅かの染み跡はあるもののかなり軽減され、B2r:17には波打ちはあるものの染みがみられない。

B1rで汚損が食い止められた格好だが、これはB紙が厚手の雁皮紙であることと関係するだろう。同様にH紙～M紙（H, I, K, L, M紙）にかけても左上（右上）は強く波打ち染み跡もみられるが、H紙はA紙よりも染み跡が強く広範囲に現れ、その影響はI2rまで及ぶが、その後軽減され、K紙では殆ど目立たず、L紙では殆どみられなくなる。M紙では再び広範

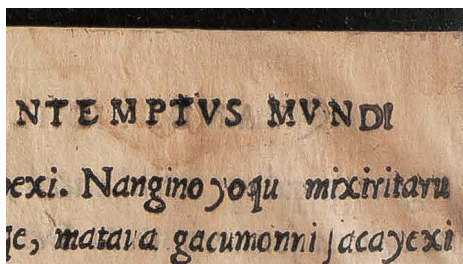


図 14 A8v 染み跡 (上部)



図 15 B1r 染み跡 (上部)

囲に現れており、M1r : 175と対面となるL8v : 174との相違が顕著であるが、こうした染み跡の変化は紙の厚さと連動する(表2)。

表 2 用紙の厚さと染み跡の関係

用紙	H紙	I紙	K紙	L紙	M紙
厚さ	薄手	薄手	厚手	厚手	薄手
染み跡	強い	中程度	中～弱い	弱い	強い

同様に R5r : 262 の右側に現れる染みは R8v : 269 まで続き、用紙が切り替わる S1r : 270 から殆ど見えない。X紙とY紙の切り替えにも同じ現象がみられる。

また、O1r : 206 中央にはカビの跡があり、O2v : 209 まで影響が出ている。O1v : 207 のカビの跡は頁上部も含め全体に分散しており、液体状の何かがかかった部分的な汚れではないが、O1r : 206 と対面頁であり、虫損の跡も一致する N8v : 205bis (205頁は重複) には何らの痕跡もみられない(表3)。

表 3 用紙の厚さとカビ跡の関係

用紙	N紙	O紙			
厚さ	厚い	普通			
カビ跡	なし	強	強	中	弱

これらの特徴は、製本後であっても用紙の厚みの相違により影響の出方が異なることを示している。

4.4. まとめ

ここでは、HAB 本『コンテムツスムンヂ』の印刷上の瑕疵とみられる諸特徴が、用紙の

厚みによって現れ方を異にすることを指摘した。用紙が薄いほど裏写りが激しいのは当然として、対面頁の転写も用紙が薄いほど顕著で、これは印刷時に用紙を湿潤した際に薄い紙では過湿となり、それにもかかわらずインクが乾かないうちに折り重ねた結果である。

過湿の問題は、薄い紙で染みやカビの跡がよくみられることにも関係しており、薄い用紙では湿度の吸収が不十分となり影響が表面化しやすく、そのことが書物としての品質を下げる結果になっている。HAB 本『コンテムツスムンデ』は全体としては厚手の雁皮紙と言って良いが、各用紙の厚みにはかなりの違いがあり、それが原本の汚損状態に影響している。こうした特徴は程度の差こそあれ、ライデン大学本『羅葡日辞書』・『ヒイデスの導師』にも共通している。

用紙の厚みは複製だと判別し難いが、原本調査の際には、目をつぶっていても指先の感触で用紙の切り替えが十分に感じ取れる。こうした情報は立体的な奥行きのあるもので、複製が高精細なカラーになっても平面画像からは読み取りにくい。海外の図書館のキリシタン版は、デジタル化された文献であっても原本閲覧が可能であることが多いが、今後ともこうした体制が維持されることを願っている。

注

- 1) アスンサン・豊島（2012）は『天草版 ラテン文典』（エボラ公共図書館蔵）の用紙について、「当時のイエズス会記録が「鳥の子」（torinoco）と呼ぶ楮斐紙」とし、雁皮紙とは見ていない。岸本・三橋（2017）は『フランス学士院本 羅葡日辞書』の用紙を雁皮紙としている。

参考文献

- アスンサン、カルロス・豊島正之翻刻・解説（2012）『天草版 ラテン文典』八木書店
- 姉崎正治（1932）『切支丹宗教文学』同文館（複製1976国書刊行会）
- 海老沢有道編（1978）『コンテンツス・ムンデ』南欧所在吉利支丹版集録 雄松堂書店
- 尾原悟編（2002）『コンテムツスムンデ』キリシタン文学双書 教文館
- 岸本恵実解説・三橋健書誌解題（2017）『フランス学士院本 羅葡日辞書』清文堂出版
- 小島幸枝編著（2009）『コンテムツスムンデの研究』資料篇・研究篇 武蔵野書院
- 五野井隆史（2017）『キリシタン信仰史の研究』吉川弘文館
- 近藤政美編（1980）『ローマ字本コンテムツス・ムンデ総索引』勉誠社
- 新村出・柊源一校註（1957）『吉利支丹文学集 上』朝日新聞社（復刊1993平凡社東洋文庫）
- 杉本つとむ（1984）『ライデン大学図書館蔵 落葉集 影印と研究』ひたく書房
- 鈴木広光（1994）「コンテンツス・ムンデの欧文原典」『国語国文』第63巻第4号、1-12頁
- 高瀬弘一郎（2017）『キリシタン時代のコレジオ』八木書店

- 高羽五郎 (1955-56) 『コンテンツスムンヂ 1596年版原文』 国語学資料第14輯
- 豊島正之 (1993) 「聖書の翻訳から見たキリシタン文献」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第1号、15-28頁
- 豊島正之編 (2013) 『キリシタンと出版』 八木書店
- 豊島正之 (2014a) 「キリシタン版の形」『上智大学国文学論集』第47号、1-17頁
- 豊島正之解説 (2014b) 『重要文化財 ドチリーナ・キリシタン 天草版 (東洋文庫善本叢書)』 勉誠出版
- 豊島正之 (2014c) 『サクラメンタ提要 長崎版 (東洋文庫善本叢書)』 勉誠出版
- 豊島正之 (2015a) 「キリシタン版の Vulgata 聖書引用に就て一ロヨラ「霊操」・パレト「フロスクリー」を例として」『上智大学国文学科紀要』第32号、260-247頁
- 豊島正之 (2015b) 『聖教精華 FLOSCVLI (東洋文庫善本叢書)』 勉誠出版
- 松岡洸司・三橋健解説 (1979) 『コンテンツス・ムンヂ』キリシタン資料集成 勉誠社
- Dauer, Antje (2017) “*Thomas von Kempens „Nachfolge Christi“ in japanischer Sprache*”.
<https://idw-online.de/en/news676340>
- Laures, Johannes (1957) *Kirishitan Bunko*. Tokyo, Sophia University, 3rd ed.
- Satow, Ernest Mason (1888) *The Jesuit Mission Press in Japan, 1591-1610*. private printing.
- Triplett, Katja (2018) “*The Japanese Contemptus mundi (1596) of the Bibliotheca Augusta: A Brief Remark on a New Discovery*”. *Journal of Jesuit Studies*, Volume 5, Issue 1, pp. 123-127. DOI: 10.1163/22141332-00501007
- HAB本『コンテムツスムンヂ』(1596) <http://diglib.hab.de/drucke/57-13-eth/start.htm>
- パリ本『落葉集』(1598) <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b10508396b/> (Gallica (フランス国立図書館) 同サイトでパリ本『日葡辞書』も閲覧・ダウンロード可能)

謝辞

HAB本の発見をお知らせくださった折井善果氏と、本稿の内容全体および付属カードの解読、印刷技法からみた諸特徴に関しご教示賜った豊島正之氏に、心より御礼申し上げます。また、現地調査の際ご協力くださった岩澤克氏・中野遙氏、画像の掲載を許可してくださった各図書館に、感謝申し上げます。なお本稿は、第7回キリシタン語学研究会(2017年9月8日於南山大学)における調査報告に基づくものです。

本稿は、JSPS科研費17H02341, 15K02573, 17H02392, 18K00608による成果の一部です。

Newly discovered copy of *Contemptus mundi* (1596) of Jesuit mission press
in Japan in the Herzog August Bibliothek

Emi KISHIMOTO, Jun SHIRAI

A copy of *Contemptus mundi*, the Japanese translation of *Imitatio Christi* printed with Roman types in 1596 in Japan, has been recently discovered in the Herzog August Bibliothek (HAB), Wolfenbüttel in Germany. Now there are three copies of the book in the world. Beside the one in HAB, there is one each in Biblioteca Ambrosiana, Milan, and Bodleian Library in Oxford. The copy in HAB was accompanied with an anonymous handwritten note, saying the copy was delivered in 1662 to the Duke August, whose collection of books laid the foundation of the library. The discovery of the copy is important not only because it could provide us more data to examine the process of translation, but also because it is a good sample of books with uneven paper quality.

When the HAB copy is compared with the Ambrosiana and the Bodleian copies, the texts were found to be slightly different from each other. However, the HAB copy is similar to the Ambrosiana copy on the point of the Latin quotation from the Bible on p. 6, which is completely corrected in the Bodleian copy. According to several letters of the Jesuits in Japan, the Japanese translation of *Imitatio Christi* had already been done in the 1580s, and the printed version should have been edited referring several different European editions. So far it has not been determined which edition the translator(s) mainly used from the several available European editions, including the Latin version and the Spanish translation by Luis de Granada. The wrong quotations from the Bible could become one of the evidences indicating that the original European editions may have been referred for the Japanese translation.

Regarding the paper of the HAB copy, the Japanese Gampi paper was used in it. Gampi is a clove-like bush and Gampi paper is made from its fiber, quite valuable at that time because of its beauty and strength. However, the quality of the paper used in the HAB copy is not fine. The thickness of the paper is uneven throughout the copy, and some pages are thinner than the others. On thin pages, we can easily see through the printed characters on the back of a page, and sometimes find a long fiber of bark. Further, the thin paper of inferior quality absorbed moisture and became extremely damp during

binding because the paper was moisturized for printing, and piled soon after the printing was finished. Therefore, not only were the spots transferred from the opposite page, but the paper also accrued several stains and mildew. When studying other books of Jesuit mission press in Leiden University Library, such as *Fides no dōxi* (1592), meaning a priest of faith, and the Latin-Portuguese-Japanese dictionary *Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum* (1595), we can also identify more or less similar examples of there being more spots on thinner pages.